退職記念随筆

法文坂上ル下ル

近　藤　昌　夫

拙老が、人類のはしくれの小さな一歩を千里山キャンパスにしるしたのは、1993年3月末のことであった。正門にて文学部の学舎は何処にやあらむとこと問へば、坂の上なりと返ってきた。礼を述べ、立派な図書館をしばし仰ぎ見てのち、タテカンの壁を横目に坂道をのぼった。

桜の枝が足元に次々と影を落としてくる。まもなく右手に視界がひらけた。すり鉢状の斜面に等間隔の縞模様を描くベンチと、ネオ・ゴチック風の円筒の建物がグランドを見下ろしている。脳裏にぼんやりとローマ劇場が浮かんだ。さらに坂をのぼると、左手からバロック建築風のくすんだアーチと、白壁に蔦の枝が這う赤い屋根の建物があらわれた。ここはユトリロの街角なのだろうか…。坂道の傾斜が緩み、横綱級の楠と、凛々しい立ち姿の松の木がゆっくりと近づいてくる。左手に目をやると、赤い帽子を被り、白壁を額縁にして温室のように連なる、身の丈ほどの格子ガラスが、庭と小道を眺めてモダンな洋風趣味を醸し出していた。コルビュジエを思い出しながら、下りはじめた坂と交差する、高架橋のような建物の影で歩みを止めた。辿ってきた坂道はずっと先のほうでタイル張りの大きな建物に飲み込まれている。顔を上げると一本の通路が跨線橋のように左右の建物を繋いでいた。ポンテベッキオを連想していると、石畳を規則正しく叩く乾いた響きが近づいてきた。しばらくして目の前を乗馬ズボンの若者が手綱を引いてすうっと通り過ぎていった。ローマ兵ではなかった。我に返って踵を返し、「護法の神様」の御許に馳せ参じた。拝謁の栄に浴した児嶋惟謙像の、俯き加減の眼差しは、豊津のハリストス教会の方角に静かに注がれていた。

その後、とある会議で例によって「うわの空」を飛行中にふとこの日のことが蘇った。大小ふたつの「橋」と交わる第1学舎への坂道は、俯瞰すればちょうどロシア正教の八端十字が収まるではないか！。だが思いもかけぬ大発見に浮かれている場合ではなかった。「護法の神様」の眼差しは茨の道を仄めかしていたのである。

1991年、大学設置基準の大綱化によって教養部は解体・統廃合の憂き目に遭った。外国語教育にもいっそうの自助努力が求められた。危殆に瀕した第2外国語はというと、複眼的思考を説いたり、相対的価値を並べ立てたりする勇ましい講演やセミナーが全国各地で盛んに開かれ、蜂の巣をつついたような有様であった。拙老が本務とする魯西亜語などは、開国以前より「恐露病」（二葉亭四迷）なる、遺伝子レベルといっても過言ではない病に冒されていたこともあり、あれよあれよという間に絶滅危惧種となっていったのだった。受難の時代である。

すでに前任校で一度波に呑まれていた拙老は、同じ轍を踏まぬよう、動機開発の模索に活路を求めた。論より証拠、「百聞は実験に如かず」、である。こうして語り種となる「キリールの変」が勃発し、「カルチャー乱れ打ち」が始まったのだった。

ある時は西の阪急三宮駅に参集し、学生たちと異人館、居留地、バレンタイン・デー発祥の洋菓子店「コスモポリタン」を訪い（「阪神間モダニズムを振り返る」）、またある時は東の高槻アイスアリーナで「運動の動詞」を実践し（「滑って、転んでパ・ルースキ／「ロシア語で」の意」）、またある時は南のサントリー・ミュージアムで鑑賞に先立ちレクチャーを開催し（「イディッシュ文化圏のシャガール」）、千里山から遠征することしばしばであった。そして一連の「ある時」を体験した学生たちの中から、ある日出力を買って出る者があらわれ、高大連携の「異文化体験セミナー」（「ロシアのクリスマス」「アニメの殿堂トイの伝統」等々）や大阪府の中学生向けセミナーで「ロシア語のいろは」を指南したり（「カプセル・キリール」）、外務省の交流事業等でロシアの客人達を学内や府内に案内したりしたのだった。

これら一連の「乱射」は、活動と動機の抜き差しならぬ関係を検定試験や学外のスピーチ・コンクールで恒常的に証明したほか、時にはコーラス・ユニット「しべりあ歓喜団」や電子楽器演奏団「マトリョー民（みん）」などの副産物をもたらしたりしたが、顔ぶれに偏りがあった。ありていに言えば、やつがれも含め、偏愛的物好きの集まりだったのである。常軌を逸していただけだった。ロシア語に偏らず、広く一般の無意識に作用しなければ「教養」の名には値しない。みずからを叱咤した（「喝！」）。

篩にかけられたのが「ピロシキ・ワークショップ」と詩の暗唱コンクール「プーシキン・リハーサル」そしてプレゼン・コンクール「ヨールカ」だった。

2002 年、児嶋惟謙像に見守られながら始まったピロシキ・ワークショップは、コロナ禍後に再開。造形的アルファベットと対話を練り込んだ通行手形「関所の会話」をこなした者だけに、自ら作ったピロシキを口に運ぶことが許される、歴とした実学である。新緑の季節に、料理の寸劇で幕を開けるこの教養の種は、その後教室でしっかり「こねられ」、徐々に「発酵し」、夏の「プーシキン・リハーサル」と冬の「ヨールカ」でふっくら「焼きあがる」。学生たちは例年、あるいはダンスや合唱または小芝居だったり、あるいは日露の対極的食糧戦略から食料安全保障実現に至る考察だったり、あるいは「化学の実験室」といわれるキッチンで試した料理の動画だったり、「語が苦」から「語楽」へとめくるめく創意工夫の羽を広げている。このように、一丸となって無意識の動機を刺激する三者は、いつからともなく「トロイッツァ（三位一体）」と呼ばれるようになり、「生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付ける」食育基本法に応え続けているのである。同法の公布・施行はピロシキ元年の 3 年後の 2005 年のことである。当局のお忍びの視察があったに違いない。

「キリールの変」から「トロイッツァ」までの教養ロシア語は文学部、外国語教育研究機構、そして外国語学部に庇を借りて三十数年の約 3 分の 2 を 1 名体制で運営してきた。この間、学

びの動機それ自体の模索はもとより、世にも珍しい実習・実験を重ねてこられたのは、ひとえに非常勤の奇特な先生方の豊富なアイディアと溢れんばかりの熱意のお陰である。長期にわたる、持ち出しのご支援には感謝の言葉がみつからない。

2025 年の法文坂は、見上げれば切り通しのように空にひらけて見通しがいい。道幅にも余裕がある。登り始めると希望に満ちた未来に誘ってくれるかのようだ。だが体は正直である。拙老など、にわかに登山者気分になり、先輩諸先生方の御退官間近のあの口癖──「登りがしんどくなったら潮時やで」──が新幹線の車内表示のように脳裏を過りはじめる。それでも、息があがる「8 合目」あたりで学生達の笑い声やおしゃべりとすれ違ったりすると、すっかり細くなった脹脛に不思議と力が入ってふたつの「橋」や、「段々畑」「ユトリロの街角」「コルビュジエの一角」がありありと蘇り、気がつけば研究室のドアノブに手をかけている。32 年もお世話になったうえに、永遠と触れ合う稀有な機会を頂戴し、誠に果報者である。

最後になったが、外国語学部の紀要が、3 つの「庇」の下を転々と「移動」した、生半可な老ノマドの腰折れに貴重な紙面を割いてくれるという。身に余る光栄である。深謝。